

# Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.9 September 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
羅生門効果  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」  
(13)  
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相②  
／加藤 匡人 ..... 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (21)  
天理教布教所の仏教寺院化  
／山西 弘朗 ..... 3
- ・ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (最終回)  
不登校支援における天理教の社会福祉活動 (2)  
／深谷 弘和 ..... 4
- ・ イスラームから見た世界 (30)  
イスラーム神学者の仕事②—天理教学のすすめ  
／澤井 真 ..... 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教への伝播— (35)  
8. コロンビアへ！教への伝播1「コロンビアとバナナ」  
／清水 直太郎 ..... 6
- ・ ニューヨーク通信 (21)  
アメリカ伝道庁創立 90 周年を終えて  
／福井 陽一 ..... 7
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 8  
「2024 年度天理大学アメリカス学会夏定期例研究会」で発表／第 369 回研究報告会 (7 月 29 日) / 2024 年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### 羅生門効果

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

「羅生門効果」とは 1950 年に公開された黒澤明監督の映画『羅生門』に由来する社会科学の用語である。1988 年にアメリカ人類学会の学会誌で発表された論文 The Rashomon Effect: When Ethnographers Disagree (羅生門効果:エスノグラファーの意見が異なる時)が、この用語の起源と思われる。文化人類学では、同じフィールドを調査した研究者の間で対象文化について全く異なる解釈がなされる場合がある。この論文は、そのような問題を解決するためには、真偽を見極めようとする実証主義的なアプローチより、構築主義的アプローチで調査そのものを検証すべきであると提唱する。欧米の知識人は黒澤明の映画についてよく知っているので、この論文のタイトルの Rashomon Effect の意味するところをすぐさま理解するだろう。私が留学中に受けた人類学の授業でもこの論文は扱われ、学生たちは「ああ、あのアキラ・クロサワのラシヨウモンね」という体で意見を述べ合っていたように思う。

映画『羅生門』は、芥川龍之介の短編小説『藪の中』を原作とし、同じく彼の『羅生門』から舞台設定を借っている。平安時代のとある山中、盗賊が昼寝をしていると、侍夫婦が通りかかった。妻に目をつけた盗賊は夫を騙して縛り上げ、彼の目の前で妻を強姦する。その後、現場には夫の死体が残され、妻と盗賊の姿はなかった。これが事件のあらましであり、羅生門で雨宿りしている杣売りと旅法師が、同じく雨宿りをしていた下人に検非違使所でなされた関係者の証言について説明する形で、物語は進行していく。盗賊と侍の妻、殺された侍の証言は三者三様であった。盗賊は、侍の妻が「男同士で戦って生き残った方について行く」と言うので決闘の末に侍を倒したと主張し、侍の妻は強姦された自分に対する夫の蔑みの目に耐えられず錯乱状態で縛られている夫を殺したと述べる。一方、殺された侍は巫女の口を借りて、妻が盗賊に「あなたについて行くので夫を殺してくれ」と頼む姿を見て絶望し、二人がその場を去っ

た後、自害したと証言する。

茂みの中から事件の成り行きを目撃していた杣売りは、三人の証言を下人に説明した後、彼の見たことを話すが、その内容は盗賊が侍を殺したという点で盗賊の証言と一致するものの、盗賊と侍が決闘するに至った理由も決闘の様子も盗賊の説明とは全く異なるものであった。だが、客観性を期待される第三者としての杣売りの証言により、ほとんどの人は侍を殺したのは盗賊であると考えただろう。ところで、侍にとどめを刺した武器は盗賊と杣売りの証言では盗賊の刀であり、侍とその妻の証言では妻の短刀であったが、その短刀は現場に残っていなかった。一方、侍は誰かが自分に近寄り胸に突き刺さった短刀を引き抜くのを薄れいく意識の中で感じた（巫女の口を借りて）証言するが、巫女の背後でそれを聞いていた杣売りは驚きの表情を浮かべる。そのような伏線があり、最後に下人が短刀を盗んだのは杣売りであると見抜くに至って、信頼できると思われた彼の証言にも疑念が生じる。こうして事の真相は「藪の中」のまま、物語はエピローグに入っていく。

この『羅生門』のあらすじを知っていれば、「羅生門効果」と聞いて、それは一つの出来事について関係者が互いに矛盾した解釈を行ってしまうような現象を指しているのということが分かる。この物語の場合、現場に定点カメラを置いて録画しておけば、スポーツのビデオ判定のように、より正確な判断を下せるかもしれない。しかし、映像データでも事の真相を明らかにできない場合もある。2010 年 9 月に尖閣諸島沖で中国漁船衝突事件が起きた。その動画はネット上に流出して今も視聴可能だが、日本の巡視船と中国漁船のどちらに非があったのかは、同じ映像を見ても日本人と中国人とは判断が分かれるに違いない。立場が異なれば同じ出来事についての解釈が異なるという点では、『羅生門』のエピソードと何ら変わらないのである。

## ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相②

## フランスへの留学生派遣

諸井慶徳が馳せたヨーロッパとくにフランス伝道への思いは、諸井が大教会長を務めていた山名大教会所属の鎌田親彦に託されることとなる。鎌田によれば、1960年8月25日に諸井が帰国してから1週間後の9月初旬に、諸井から直接フランス行きの話があったという。それは、教祖80年祭に向けて海外布教推進が謳われた「論達第二号」が発表される前年で、その時すでに山名大教会では新たな海外布教の動きが始まっていた。また、戦後に天理教の布教目的でヨーロッパに渡った人物としては、おそらく鎌田が最初であっただろうと思われる（鎌田親彦氏へのインタビュー、2014年11月11日。以下、鎌田の証言はこのインタビューにもとづく）。

鎌田は当時、天理教校本科の1年生で、山名大教会の学生寮で舎監をし、同時に会長宅に勤めながら本科に通っていたという。卒業後の進路としては、アメリカ伝道庁に勤める、もしくは大学院に通ってから天理大学で教鞭を執るといった話があったようであるが、諸井の遺言ともなるフランス布教への思いを受けてからは、本科へ通いながら京都日仏学館の通信講座を受け始めることになった。そして1962年4月からは2年間の予定で東京の日仏学院に通うことになっていたという。山名大教会としては、フランスには永住のつもりで行ってほしいとの意向で、鎌田は教会の後継者という立場ではあったが、鎌田本人、また会長である鎌田の母も、永住について同意していたという。

この時点では、鎌田の派遣元は山名大教会であった。しかしその後、1961年には、ヨーロッパに拠点を設立することを見据えて天理教教会本部として布教師を送る動きが上がり、鎌田を教会本部から派遣したいとの意向が山名大教会に伝えられた。その後、天理教海外伝道部（現・天理教海外部）との間で派遣元をどこにするかの相談があり、中山正善2代真柱の指示で、天理教一れつ会派遣留学生という立場で派遣されることになる。

また、この鎌田の派遣に加えて、天理教海外伝道部と天理教青年会本部としても、「論達第二号」の発表を受けて、ヨーロッパに人材を派遣したいという動きがあった。その派遣先が何故パリになったのかは定かではないが、鎌田が聞いたところによれば、フランスに派遣する人材を公募したところ応募者がおらず、当時の青年会海外部長であった高橋一男の義理の弟にあたる田中健三に打診があったという。田中は、慶応大学でフランス哲学を専攻しており、本人及び教会長である父もフランス行きを承諾し、鎌田と同じく一れつ会派遣留学生としてフランスに赴くことになった。鎌田はその後、1964年11月12日に日本を出発して同年12月にフランスに到着し、田中は翌年の1965年4月に来仏した（天理教ヨーロッパ出張所 1992:10）。

ところで、当時のパリでの生活の様子はどうかであったのだろうか。鎌田の回想によれば、1964～65年頃は在仏日本人は5,000人ほどしかおらず、長期滞在者は数えるほどで、大使館のパーティー等で皆が会うぐらいの規模であったとい

う。総理府が調査した統計によれば、フランスにおける在外邦人数は、鎌田が渡仏した4年後の1968年に3,226人となっており（総理府統計局 1971:22）、この5,000人という数字は、実際の統計から見ても決してかけ離れた数字ではないことが分かる。また、パリには日本料理屋は4軒のみで、パリの学生街であるカルチュラタンに日本食品を売っている中華食料品店が1軒あったが、味噌の缶詰と醤油が置いてある程度であったという。

また、財政面については、当時は国の外貨持ち出しの規制もあり、資金面でも工夫が必要であったようである。鎌田によれば、当時は私費の留学生でも外務省の試験に受からないとフランスのビザが取得できず、外貨も許可されなかったという。運輸省が発行する『昭和43年度運輸白書』の「国民の海外渡航の状況」によれば、ちょうど鎌田が渡航する1964年の4月1日以降になってはじめて、観光渡航で1人あたり年間1回かぎり500ドル（1ドル＝360円）までの持ち出しが許可されたばかりで、その年間1回かぎりという上限が撤廃されるのは1966年1月1日以降のことである（運輸省 1968）。

鎌田は、2年間の予定でフランス留学を申請し、外貨も2年分獲得することが出来た。しかし、永住の覚悟で渡仏していたため、2年分の資金で出来るだけ長い期間、可能であれば4年間は滞在するつもりだったようで、この獲得した資金で足りない分については、旅行者の案内や通訳といったアルバイトで補ったとのことである。鎌田によれば、当時は旅行代理店もなかったので、団体ツアー等はなく個人旅行者だけであったようである。また、商社の関係者でもフランス語のできる人は少なかったため、そういった関係者が地方へ行く際に同行したり、商談の通訳などもしたそうである。鎌田は、1968年に海外伝道部の出向者という立場になるが、それまでの3年8カ月間はこういった形で生活を続けていた。

生活面については、田中健三が来るまでの約5カ月間は、水も暖房もないホテルの極めて狭い屋根裏部屋で暮らしていたという。洗面をする際には、部屋に洗面器を3つ用意し、下の階のトイレから水を汲んできて済ませていたと回想している。食事については、昼は主に学生食堂で喫食したが、朝と夕は部屋でキャンピングガスを使って料理をし、そこへよく友達を呼んで会食をしていたそうである。田中も、到着してから約10日間ほどは同じホテルの別の屋根裏部屋で生活し、その後二人で別のアパートに移ったという。

## [引用文献]

運輸省編『昭和43年度運輸白書』大蔵省印刷局、1968年  
<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa43/index.html> (2024年8月2日閲覧)。

総理府統計局編『日本の統計1970年』総理府統計局、1971年。  
 天理教ヨーロッパ出張所編『天理教パリ出張所20年史』天理教ヨーロッパ出張所、1992年。

## 天理教布教所の仏教寺院化

## 戦後台湾における天理教の変容

第2次世界大戦の敗戦により、日本は植民地としての台湾を失った。新たに統治者となった中華民国（中国国民党）は、台湾社会の“日本色”を一掃する政策を取った。この対策として嘉義東門教会や北港布教所は、民間信仰を取り入れることにした。廟の玉皇上帝の神像を譲り受け、その背中に穴をあけて「神実」（<sup>かんざね</sup>神体）を入れることにした。神実は本来、「やしろ」の中に入れるものなのである。そして、祭壇の向かって右側、もともと教祖のやしろがあった位置に教祖の木像を、祭壇の向かって左側、もともと祖霊のやしろのあった位置に先祖の位牌を祀るようになった。

このような信仰形態の変容は、斗六教会部内の布教所の方法と一致している。それは決して単なるカムフラージュではなく、漢人民間信仰による天理教の読み替えであり、それが顕在化するかどうかの差異はあるものの、台湾漢人の宗教文化的スキーマによる天理教認識と捉えることができるのである。黄智慧が指摘しているように、「神の変名」は台湾人信者によるもので、台湾人を対象とする布教が展開されるにつれて余儀なくされた現地語化の結果だと言える。

では、なぜ斗六教会部内の布教所は仏教寺院に所属することになったのか。これは、嘉義東門教会や北港布教所が官憲による直接的な迫害をほとんど受けなかったのに対して、斗六教会部内の布教所はかなり厳しい迫害を受けたことを原因としている。同じ台湾とはいえ、地域によって“日本色”として迫害される対象は、実際に取り締まりを行う現地の警察関係者らの判断に委ねられていたのである。

## 天理教布教所の仏教寺院化

これらの布教所が“日本色”として迫害を受けた大きな理由は、視覚的な要素と言語的な要素であった。視覚的なものとしては、やしろや三方（三宝）、教服などが挙げられ、言語的なものとしては、祝詞やおつとめの地歌がそれに当たる。視覚的なものは、現地のもので代替することができるが、おつとめが勤修できないとなると、



「天理」と記された仏教式の位牌

天理教の信仰を続けていくことがほとんど不可能となった。

筆者が当時の状況の聞き取り調査をすると、斗六教会の元布教所関係者は口をそろえて、自分の父の世代の天理教布教師は戦後何度も逮捕、拘留され、天理教を止めるよう警察署で厳しく咎められたという。そんな中、現地の警察署長の息子が病気を患ったため、天理教が本当に靈験ある宗教であれば治してみよと言われた。そこで、誠心誠意、

神様にお願いをして、おたすけに努めたところ、病気が治癒した。そこで、署長は天理教が靈験ある確かな宗教として認めることにした。しかし、今のままの形で信仰を続けることはできないと言う。そこで、彼らは、どのような方法で信仰を続けることができるかと相談した結果、真一堂（齋教の寺院）へ学びに行くように勧められた。真一堂には、当時宗教団体として唯一政府に許可されていた中国仏教会台湾省雲林県支会の事務所が設置されていたのである。そして、斗六教会部内

最も早く布教所となった西螺をはじめ、崙背、斗南の布教所長らが真一堂で、まず1週間ほど修行を受けたようである。彼らは、儀礼に用いる仏教經典の読み方や意味を学ぶとともに、儀礼の作法を学んだ。それらを習得



寺院に掲げられた中国仏教会の団体会員証した結果、中国仏教会の団体会員として、仏教寺院になることができたのである。

## 天理教所属復帰の障害

これらの元布教所は、中央の祭壇に天公の神像を祀っていた。天公とは現地語化した親神のことである。それに加えて、仏像をも祀ることにし、それらの仏像に適した仏教經典を唱えることにした。2008年から2009年にかけて筆者は現地調査を行ったが、經典はすべて台湾語（閩南語）で唱えられていた。戦前に日本の統治下で日本語教育を受けた世代から、戦後に中国語で教育を受けた世代に継承されるときに、この台湾語による宗教的継承が行われた。その結果、日本語をおつとめの地歌とする天理教にはもはや回帰することができなくなってしまったと言う。

1970年代から、天理教本部が台湾伝道庁を中心に台湾の天理教を本格的に復興させようと動き出すが、すでにそのころには、これら斗六教会部内の元布教所ではおつとめを介さない信仰のあり方が整っており、わざわざ日本語のおつとめを学んで天理教に属する必要がなくなっていた。なぜなら、当時すでに仏教寺院として信者を集めており、毎年大規模な法会を執行していたため、再び形の大きく異なる天理教に回帰することで、すでに獲得した信者が離れてしまう恐れがあったのである。

戦後にこのような変遷をたどった斗六教会部内の布教所は少なくとも4カ所あり、筆者はこれら全てで聞き取り調査を行なった。台湾の漢人民間信仰は由来を重視する傾向がある。こうした元布教所はすでに天理教を離れ、仏教寺院として存在しているとはいえ、自らの寺院のルーツが天理教布教所であることは自覚している。その証拠として、これらの寺院の名称にはすべて「明」という文字が使用されている。これは、天理教の神である親神が「月日」と称されるという教えから名づけられたものである。また、向かって右側の祭壇は教祖の木像を祀り、向かって左側の祭壇には祖先の位牌を祀っているが、位牌にはわざわざ「天理」と彫られている。

戦後の迫害が厳しかった雲林地域において、天理教の布教所が現地の人々のたすけの場となる信仰拠点として存続するため、知恵を絞って様々な方法や工夫を探り、その結果として現在の姿がある。こうした現状について、調査し記録することは天理教の現地化を考える上でも重要なことである。

## [参考文献]

黄智慧 (1989) 「天理教の台湾における伝道と受容」『民族学研究』54(3): 292 ~ 309 頁。

山西弘朗 (2011) 『天理教在台湾の信仰形態の変遷：一個宗教人類学的考察』国立政治大学民族学研究所修士論文。

## 不登校支援における天理教の社会福祉活動 (2)

天理大学人文学部准教授  
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

前回(7月号)は、不登校の実態について整理した。不登校が生じる背景は、一人ひとり異なり、その原因は多面的である。いじめなどの人間関係をはじめとした不登校のきっかけとなる原因を解決したからといって、再び登校したり、社会参加したりすることができるようになるわけではない。不登校支援では、生きるためのエネルギーが低下した状態に対して、時間をかけて寄り添いながら回復するのを待つことが欠かせない。今回は、不登校問題に対する天理教の社会福祉活動を整理する。

### 天理教における不登校支援

天理教では、各地の教会長をはじめとした信者が、不登校に悩む本人、家族の支援をおこなってきたが、例として3つの取り組みを紹介する。

まず、天理教由利道分教会長の佐々木則夫氏が代表をつとめる「グレープネット・ゆり」の取り組みがある。「グレープネット・ゆり」は、秋田県を拠点に、現在はNPO法人として、自立援助ホームの運営や、子育て支援講座の開催など、子ども・若者の支援活動に取り組んでいる。不登校支援においては、通信制高校の由利明誠高等学院を設立し、支援をおこなっている。また、同法人の認定資格として、不登校支援相談員の資格を準備し、不登校支援に携わりたい人を対象に研修を開いている。研修は、定期的に天理市でも開催されており、天理教関係者が不登校に関する基本的な知識や、本人や家族に対する支援の姿勢を学び、不登校支援に携わっている。

天理教蘇我町分教会長の新田恒夫氏が代表をつとめるNPO法人「スペース海」も、これまで約30年にわたり、不登校支援をおこなってきた。千葉県を拠点として、不登校の本人や家族への相談活動、居場所や作業場の提供や、発達障害をはじめとした障害のある子どもへの支援をおこなっている。2021年からはYouTubeにおいて「不登校チャンネル/スペース海」を開設し、不登校の経験者のほか、親や支援者の声を発信している。天理教の信仰者としての不登校支援の経験についても、養徳社のYouTubeチャンネル「陽気チャンネル」や、天理教布教部のYouTubeチャンネル「天理の教えチャンネル」でも発信をしている。新田氏が取り組んできた不登校支援の内容や、信仰的な思いについては、本連載でも紹介した『子どものおたすけ—発達障害・不登校・虐待・イライラしない子育て法』(養徳社)にまとめられている。

天理教安東分教会では、教会の子弟である高部春菜氏によってフリースクール「みんなの教室」が運営されている。小学校の教員であった際に、不登校をはじめとして生きづらさを抱えている子どもに出会い、教員を退職の後、大分県別府市で初のフリースクールを教会で開設し、居場所支援をおこなっている。学校に行けずに、家で過ごす子どもの居場所を提供し、子どもが自らの気持ちを語れるまで待ち、家族や学校に子どもの思いを伝えることで、地域における子ども支援のネットワーク形成のハブとなっている。2024年2月26日～27日、天理教布教部の「ひのきしんスクール講座」において、「不登校～子どもの事情を通して～」が開催され、その活動内容が報告された。

### 不登校支援にみる天理教の信仰的態度

ここまで天理教内における不登校支援の例を提示したが、これらは一例であり、先述したグレープネット・ゆりの不登校支援相談員として活動している天理教関係者は少なくない。また、自分が不登校であったり、子どもが不登校であったといった自らの経験を活かして、不登校で悩む人をサポートする人たちもいる。先述した天理教ひのきしんスクールのパネルディスカッションのテーマは「子どもの事情を通じた私たちの成人」となっている。そこで最後に、不登校支援に関わる人たちは、どのような信仰的な気づきを得て、それを支援につなげているのかを整理する。

1点目は、不登校を通して、自らの当たり前にしてきた価値観を見直すことである。「学校に行けない/行きたくない」という子どもを前にした際に、「学校には行かなくてはならない」、「他の子どもと同じようにできなくてはいけない」、「嫌なことから逃げなくてはいけない」といった親や教師をはじめとした大人が持つ「当たり前」の価値観が現れ、子どもとぶつかってしまうことになる。しかしながら、生きるためのエネルギーが不足している本人に対して、登校することをはじめとして何かを強制することは、逆効果となってしまう。そうした中、先述の新田氏の著書では、教祖の「ひながた」が紹介されている。あらゆるものを施し、「貧のどん底」にある中で、「水を飲めば水の味がする」と語り、人間が親神によって、生かされていることへの感謝を示した「ひながた」は、不登校支援をはじめとした子どもの支援においては重要だと、新田氏は指摘している。

2点目は、不登校に関わる経験を、救済活動(おたすけ)に活かしていくことである。繰り返しになるが、不登校は、そのきっかけとなる問題が解消することで解決するわけではない。生きるエネルギーが低下した状態にある本人が、少しずつエネルギーを貯め、自らの思いを口にして、動き始めるまで、関わる人は、寄り添い、耳を傾け、共感し、伴走する。こうしたプロセスは、不登校に限らず、病気や障害、さまざまな悩みを抱えた人への支援に共通するものである。不登校を経験した本人であれば、その経験が他者に寄り添う際に活かされると捉え、不登校の親や支援者であれば、寄り添うことの難しさの経験が、自分を成長させてくれると捉える。信仰者たちは、子どもに寄り添うプロセスを教祖の「ひながた」に学び、陽気ぐらし世界の実現に向けて、自らの役割を自覚する契機としている。

前回も述べたように不登校は、その数は約30万人に達しているにもかかわらず、社会資源は少なく、支援につながないケースも多い。不登校という形でSOSを示す子どもを中心として、周囲の大人が変わっていくために、各地の教会の信仰者が仲介者となって、子どもを地域で支える社会づくりが進んでいくことが期待される。

ここまで16回にわたり、天理教の社会福祉活動について連載してきましたが、今回で連載終了となります。お読みいただき、誠にありがとうございました。

「イスラーム神学」が指すものとは

「イスラーム神学」という語が用いられるとき、多数派であるスンナ派のそれを指しているのか、少数派であるシーア派のそれを指すのか、あるいは幅広く両者を指しているのかはしばしば判然としない。一般的には、筆者を含めた多くがスンナのなかでも特にアシュアリー学派に基づいた神学を指して概説的に話しているように思われる。スンナ派におけるイスラーム神学を理解することですら難しいのに、ましてやイスラームにおける神学の全体像を理解することはほとんど不可能である。

日本におけるイスラーム神学の説明は、このアシュアリー学派の説明を中心に構成されてきた。しかしながら、スンナ派ではマートウリーディー学派 (al-Maturīdīyah) が、アシュアリー学派と並ぶ二大神学派として認識されている。

さらに、「ハディースの徒」(ahl al-hadīth) もまた、サウジアラビアやイスラーム国 (IS, Islamic State) などの現代イスラームを理解するうえで重要な神学的潮流である。キリスト教神学についての議論であれば、高校世界史の教科書にも登場する一方で、イスラーム神学についてはほとんど知られていない。

今回は松山洋平著『イスラーム神学』を取り上げ、イスラーム神学における神学的命題について考察する。

#### 神学派の特徴

アシュアリー (874 ~ 936 年) が創始したアシュアリー神学派に対して、マートウリーディー (853 ~ 944 年) が創始したマートウリーディー神学派は、スンナ派の四大法学派の一つであるハナフィー法学派の神学としての役割を果たしてきた。前回、アシュアリー神学派に所属したガザーリーを考察した際に、イスラーム神学に対するイスラーム法学の優先性について触れた。アシュアリー神学派はシャーフィイー法学派との結びつきが強く、マートウリーディー神学派はハナフィー法学派と結びついた。こうした神学と法学の布置は地理的分布に対応していると言ってよいものであろう。シャーフィイー法学派はエジプトや東南アジアを中心に広がり、ハナフィー法学派はトルコや南アジアを中心に広がっている。すなわち、それぞれの地域にアシュアリー学派とマートウリーディー学派が展開したのである。

一方で、ハディースの徒については、イブン・ハンバル (780 ~ 855 年) によって創始されたハンバル法学派と結びついた。このハンバル法学派に所属したのが、イブン・タイミーヤ (1263 ~ 1328 年) であり、彼から影響を受けたのがワッハーブ主義やサラフィー主義である。松山によれば、マートウリーディー学派は、ハディースの徒と比べると、アシュアリー学派と神学的に近い見解を取ることが多いという。

#### 「一なる者」をめぐる神学的見解

「タウヒード」(tawhīd) という語は、神を唯一なる存在と認めることを意味する。この語は、イスラームの信仰生活の中心を成す語であるが、アシュアリー学派とマートウリーディー学派の見解では、タウヒードには以下の3つの側面があるという。

①本体におけるタウヒード (tawhīd fi al-dhāt)

②行為におけるタウヒード (tawhīd fi al-af'āl)

③属性におけるタウヒード (tawhīd fi al-sifāt)

①については、神があらゆるかたちで分割を受けない一なる者であること、②については、神はあらゆる行為を望むままに行うことができる者であること、③については、神は「神」以外の属性で説明される者ではないことがそれぞれ述べられる。アシュアリー学派に所属する神学者たちのうち、イスラーム神秘主義 (スーフイズム) にも携わったスーフイーたちは、これら3つの側面を神秘主義に援用して論じている。

それに対して、ハディースの徒は以下の3つを主張する。

①主性におけるタウヒード (tawhīd fi al-rubūbiyah)

②神性におけるタウヒード (tawhīd fi al-ilāhiyah)

③属性におけるタウヒード (tawhīd fi al-sifāt)

これら3つに関して、①については、神以外に創造主はいないこと、②については、神が崇拜対象であり終末における審きの主宰者であること、③については、人間をはじめとした被造物とは異なる諸属性を通して神を形容することが述べられる。

ここに生まれる両者の違いに関して、アシュアリー学派とマートウリーディー学派は思弁神学的に議論を構築するのに対して、ハディースの徒は預言者ムハンマドの言行録を論拠とした議論を展開する。例えば、イブン・タイミーヤは以下のように主張する。アシュアリー学派やマートウリーディー学派は、神がすべてのものの創造主であることを「神性」と捉える。しかし、多神教徒であっても神が創造主であることを認めるため、この考えは誤りである。「世界の創造主であるということは、多神教徒であっても認めうる『主性におけるタウヒード』を示すのみで、『神性におけるタウヒード』を帰結するわけではない<sup>(1)</sup>」からである。

#### 神学は必要か

自らもムスリムである松山は、「あとがき—神学のすすめ」と題してイスラームにおける神学の重要性を述べている。彼は、「神学はむずかしいので、まだ自分には必要ない」と述べたり、ムスリムか非ムスリムであるかにかかわらず、「クルアーンとハディースを読めば十分である」と主張したりする人に出会う。曖昧で多義的に読むことができるクルアーンの一節や、真偽や選定の背景を理解しないままハディースを読むことで、本当に信仰的に十分かと言えばそうではない。信仰を深め、クルアーンやハディースについての膨大な議論や方法論を拾い上げることで、「正統な信条」を導き出すことが神学という営為である。

この議論は天理教の信仰にもそのまま当てはまる。三原典を読むだけで果たして十分だろうか。言葉の背景や意味を深めていくうえで、天理教学を学ぶ必要がある。

#### [註]

(1) 松山洋平『イスラーム神学』作品社、2016年、189頁。この著作は日本においてイスラーム神学に本格的に取り組んだ初めての著作である。

## 8. コロンビアへ！ 教えの伝播 1 「コロンビアとバナナ」

元天理教コロンビア出張所長  
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアのイメージがおおよそ掴めて、「あんなのことも大体わかったワ」というところで「締め」として、今回からは天理教の伝道のことを含め、個人的な意見も交えて書いてみたい。

太田哲三氏は『コロンビアの日々』で、こう書いている。

1954 (昭和 29) 年コロンビアと日本の国交が回復し、戦後初代の日本全権大使となった土屋氏に、コロンビアへの日本人移住の話が持ちかけられた。コロンビア在住のアメリカ人農場主が、トゥマコにあるバナナ園を売りたいというものがあった。土屋氏は、日コ友好のためにもと、この話に賛同し、<sup>(1)</sup>早速調査を開始し、また出資者を探しにとりかかった。

これが話の発端である。私は次々と疑問が湧いてきた。「なぜこの地コロンビアのエクアドルとの国境 (トゥマコ) にバナナ園を開拓するのか?」「なぜこの時期なのか?」「なぜ天理青年なのか?」

### 世界のバナナ栽培の今昔とコロンビア

2021 年のデータによれば、バナナの生産量はインド、中国、インドネシア、ブラジル、エクアドルの順である。コロンビアの生産量は世界で 12 位だが、輸出量では世界第 5 位。一方隣国エクアドルの生産量は世界 5 位だが輸出量は世界第 1 位である。また、コロンビアは年間生産量の約 93% が海外市場に輸出され、その 50% が欧米向けだという。

コロンビアのバナナ産業で欠かせないのが「ユナイテッド・フルーツ・カンパニー」(略して U F C)、現在のチキータ・インターナショナルである。もともと米国資本のこの企業は 1870 年に創立以来、中南米諸国のトロピカルフルーツを手がけてきた。コロンビアでもバナナの収穫が増えてきていたが、この会社は米国の独占禁止法の影響で、1960 年には中米やカリブの大農場主に売却された。

久保俣之前コロンビア出張所長による資料 (コロンビア 50 年伝道史<sup>1)</sup>) では、ちょうど 1960 年頃の記述で、トゥマコバナナ園開拓事業責任者である富谷政明氏が登場する。

富谷氏がボゴタ市に滞在していた頃、現地のある知人から「エクアドルとの国境にある半未開のバナナ園の共同事業 (出資) 者を求めている」との情報を得たのは 1960 年の初頭であった。

そこで、このトゥマコ開拓事業が進む。

現地から僅か 50 キロメートル南にあるエクアドルのエスメラルダ地区から輸出されているバナナは、すでに日本では有名であった。富谷氏は、赤道直下の熱帯雨林であるという同じ気候条件の 1,500 ヘクタールの土地は、植え付けされている 250 ヘクタールのバナナ園の地質と同じであり、栽培可能であると判断した。そして「戦後の日本人の移住事業」に繋がるのではないかと考え、具体的なバナナ園開拓 (日本人移住) 計画をたてた。

これが後に天理教の関わる「トゥマコバナナ園開拓事業」の起りである。

日本人がエクアドルのバナナ産業に参入したことは、この場所にこの時期ということが一致し、はじめて理解できると思われる。コロンビアにおけるバナナ産業の問題と歴史的な悲劇事件

コロンビアのバナナ事情には特筆すべき事柄が一つある。残念ながらネガティブな歴史である。この機会に整理したいと思う。



U F C がコロンビアで事業を開始した頃 (1890 年頃) の写真<sup>(4)</sup>

それは、「バナナ労働者の殺戮」と訳しておくが、1928 年 12 月に起こった惨殺事件である。<sup>(3)</sup> 概略を記すと「12 月 5・6 日にマグダレーナ県シエナガ地区で起こった労働者の大量殺戮」であるが、背景には、コロンビア国家と軍隊の存在がある。

当時、U F C はコロンビアのバナナ産業の主力であった。この会社の労働者が労働条件の改善を主張し、労働交渉を行ったところ、会社側が拒否し、ストが長引いた結果、軍隊 (国) が介入し、同胞であるコロンビア人労働者及びその家族を殺戮した事件である。この事件の詳細は次の通りである。

事件の 1 カ月前、労働者は組合を通して、会社側に労働の改善を要求していた。しかし、U F C は下請け業者を利用して責任を回避し続けた。労働者は過酷な状況で暮らしていた。病気で苦しみ、病院や衛生関係のアクセスもなく、飢えに苦しみ、子供達は教育も受けられず、何の権利もなかった。ストライキを起こした労働者は、労働保険の支払い、危険手当、休日の確保、住居や病院施設の充実などを保障するように会社に要求したが、交渉は拒否され、ストライキはますます拡大した。

そして、12 月 6 日の殺戮にいたったのである。労働者やその家族らは、軍隊といえども同胞のコロンビア人である。兵士が発砲するなど考えてもいなかったという。「兵士もストライキに参加せよ、私たちは兄弟だ、ユナイテッドを倒せ」などの人々の声もむなしく、指揮官は「撃て」と発砲の命令をくださった。

このバナナ労働者殺戮事件は衝撃を社会に与えた。この後、1930 年代に U F C は急成長を遂げる。カリブ諸国、中米の 9 カ国でプランテーション経営をしており、U F C は 1933 年には全体の約 64% のバナナの輸出を担っていたのである。

[註]

- (1) 太田哲三『コロンビアの日々』(天理大学出版部、1988 年)、3 頁。
- (2) 東京に本社を置く「共栄貿易会社」の富谷政明社長。富谷氏は日本とコロンビアの国交が回復されるや直ちにコロンビアのコーヒー買い付けのためボゴタ市に事務所を構え、苦心の末、コロンビア・コーヒーを初めて日本に輸出することに成功した。
- (3) <https://repositorio.unal.edu.co/bitstream/handle/unal/32395/19092-62543-1-PB.pdf?sequence=1&isAllowed=y> "LA UNITED FRUIT COMPANY EN COLOMBIA".
- (4) <https://www.las2orillas.co/la-masacre-de-las-bananceras-y-otras-atrocidades-de-la-united-fruit-company/>

パリオリンピック

パリで開催中のオリンピックに合わせて、ニューヨーク市内ロックフェラーセンター前のスペースが、オリンピック広場となり、賑わいをみせている。この広場は冬季にはアイスリンクとなる「ザ・リング」と呼ばれ親しまれているエリアで、12月には大きなクリスマスツリーが飾られるところでもある。オリンピックの放送は、日本では複数の放送局が放映しているが、アメリカでは、2000年代からNBC局がオリンピックの放送権を持っており、その系列の独占放送になっている。視聴者はそのチャンネルが見られるケーブルテレビのプランに加入しなければならない。そのため、NBCはオリンピック中継視聴促進のためのプロモーションを全米各地で行っている。ニューヨークでは、ロックフェラーセンターにNBC本社があるので、このスペースをオリンピック村に変身させて、毎日プロモーションのイベントを実施している。期間中には、フランス料理を楽しめるブースや、ミニエッフェル塔の前での記念撮影、オリンピック中継が楽しめるほか、活躍したアメリカ選手に会える日もあるそうだ。

アメリカ伝道庁創立 90 周年記念祭

6月30日、中山大亮様、中山はるえ様を迎え、アメリカ伝道庁創立90周年記念祭が行われた。アメリカ・カナダの各地から、そして日本からの教友も含めて約700名が参集した。ニューヨークセンター管内からは目標人数を上回る約100名が参加した。

また、前日の29日には、アメリカ婦人会・アメリカ青年会創立70周年記念合同総会が開かれた。アメリカ婦人会では、創立50周年からの20年間の活動を記録した、『アメリカ婦人会70周年記念写真集』が発行された。

合同総会の後には90周年記念行事として「天理教コミュニティの課題と可能性」とのタイトルのもとパネルディスカッションが行われた。アメリカにおける天理教内の親子関係を含む多世代関係についての現状、多様な民族と接しながらの経験、LGBTQIA+コミュニティなどに関する話し合いが熱心に持たれた。

前夜祭でのファミリーフェスティバルでは、「他民族コミュニティを祝う」とのテーマで、地域コミュニティの協力を得て、メキシコ、韓国、フィリピン、日本などのフードブースが設営されるとともに、メキシコのマリアッチ音楽、中国獅子舞、韓国古典と現代音楽、新旧の人気音楽などの生演奏を楽しんだ。伝道庁では、記念祭に向けて「家族、友人、コミュニティの人たちと信仰の喜びを分かち合おう！」とのスローガンを掲げて、それぞれのコミュニティに根差した活動に努めてきたが、この日は、特に地域コミュニティの方々とともに記念祭を祝う楽しいひと時を過ごした。

当日の祭典では、真柱様のメッセージを大亮様が代読された。メッセージのなかで、伝道庁の持つ意味合い、教祖年祭に向かう三年千日の道の通り方について話され、「時には、思わぬふしに遭遇することがあるかもしれませんが、そうした中を、ひながたを思って、親に凭れて勇んで通れば、教祖は、



90周年記念祭余興を終えて NY 地区

それを見て、ご安心下さるでありましょうし、又、その皆さんの勇んで通る姿が、新しくこの道にお引き寄せ 頂く人を御守護頂けることに繋がると思うのであります。」と話された。最後に「アメリカ伝道庁は、教祖の教えを形に現して、陽気ぐらしの教えを伝え広める一つの拠点となる所であります。創立90年を迎えたこの節目から、アメリカ伝道の上に更に新しい芽が吹き伸びゆく御守護を頂くことができるよう、活発に活動をくりひろげて今日の日を意義づけて頂きたいと思えます。」と話された。

ニューヨークセンターは、伝道庁の出張場所であるので、伝道庁の活動の精神をもって、今後ともしっかりとセンターの活動の上に努める決意を新たにしました。

祭典終了後、敷地内の特設ステージでレセプションが行われ、青年会や婦人会をはじめ、各地区の教友による出し物や演奏が披露された。特に印象に残ったのは、若い人たちが結成した天理ユース雅楽会の演奏だった。学生会層が中心になり舞楽「抜頭」を披露した。これまでに雅楽の経験のない学生達が集まって、伝道庁で何回も雅楽おとまり会を行い、練習を重ね、この日を迎えた。主なメンバーはロサンゼルスやサンフランシスコ在住の学生達だ。この雅楽おとまり会が始まったきっかけは、子供の頃から伝道庁に泊まることで、伝道庁に少しでも馴染みができるようにとの願いが込められているそうだ。結成から記念祭までに実施された雅楽おとまり会は17回に達した。雅楽の合宿を通して、メンバー同士の絆も深まり、伝道庁への馴染みもできたことと思う。

ニューヨーク管内からの参加者は、約半数が40歳以下の若い人達だった。記念祭での余興は、ニューヨーク地区の青年会・女子青年が中心になって企画し準備を進めた。そのため、とても元気のいい活発な出し物となった。

今回の記念祭は、若い人達の活躍がさまざまな場面で見られ、喜び、勇み心、躍動が感じられる記念祭だったように思う。10年後に迎える伝道庁100周年には、彼らがさらに活躍する記念祭になるであろう。先人の心を受け継いで、これからの新しい道を切り開いていく「あらしきとうりょう」の頼もしさを感じる記念祭であった。

「2024年度天理大学アメリカス学会夏期定例研究会」で発表  
中西 光一

7月27日(土)、2024年度天理大学アメリカス学会夏期定例研究会が開催された。報告者の1人として、中西は「ブラジルにおける米国系プロテスタント教会の歴史的展開—南部メソジスト教会を中心として—」というタイトルで発表した。

本発表では、19世紀のブラジルにおける米国系プロテスタント教会の歴史研究の動向を整理し、南部メソジスト教会の宣教師マーサ・ワッツ (Martha Watts) の書簡に焦点を当てて彼女の宗教観と世界観の特性を論じた。まず、プレスビテリアン教会、バプテスト教会、メソジスト教会に関する先行研究を概観し、教会設立の目的を明らかにした。具体的には、次の3つの目的が挙げられる。1) 米国の南北戦争後にブラジルへ移住した南部人移民の支援・保護、2) 移民子弟に米国式の学校教育の提供、3) 米国の覇権主義と反カトリック主義に基づいたブラジル社会の文明化、民主化の推進と共和主義政体の樹立である。

次に、ワッツによるフローラ・ブルーメル (Flora Blumer) という女性奴隷の解放の事例を検証した。その結果、彼女の解放には米国の女性解放思想 (フェミニズム) が関係していた点を明らかにした。ワッツの書簡には「母性本能」、「自由」、「女性の解放」といった言葉と黒人奴隷制を批判する記述が確認されており、当時のフェミニズム運動も性差別の反対と奴隷制の廃止を要求していたからである。したがって、ワッツの宗教観と世界観の特性とは、宣教師でありながらフェミニストとして、女性の解放と奴隷制の廃止を視野に入れた伝道活動に従事していた点であった。

最後に、本発表で明らかになった点をまとめたのち、参加者から米国系プロテスタント教会によるブラジルの文明化や女性解放思想、人種主義の問題点などについて建設的な質問が寄せられた。

第369回研究報告会 (2024年7月29日)

「揺れ動く聖地像—複数の視線が絡むおぢば一枚刷り—」

井上 国太郎 (東京大学大学院)

聖地としての輪郭が定まりきっていなかった戦前のおぢばにおいて、複数のアクターがそれぞれの立場でおぢばという空間イメージを形成していたことを主張した。論証にあたって活用したのは、明治20年代から昭和20年代 (19世紀末から戦前) にかけて、異なる立場からおぢばに関わっていた複数のアクターが発行していた一枚刷り (ビラ) である。五十嵐太郎『新宗教と巨大建築』に代表される先行研究では、教団指導部による聖地整備の経緯に関心が集中しており、教団以外にもおぢば

に関わっていたアクターが複数存在していたこと、そしてそれぞれのアクターが独自のおぢば像を形成していたことが見落とされている。それに対し、本発表では一枚刷りを社会構築主義的に分析することで、世界軸=ぢばを中心に断続的に拡大していくという一元的なおぢば像が初めから確立していたわけではなく、むしろ戦前の揺籃期には複数のおぢば像が共存していたことを明示した。

## 2024年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (10) —

2024年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

- 第1回 6月 井上昭洋所長  
172話「前生のさんげ」
- 第2回 7月 澤井真研究員  
114話「よう苦労して来た」
- 第3回 9月 岡田正彦研究員  
135話「皆丸い心で」
- 第4回 10月 八木三郎研究員  
36話「定めた心」
- 第5回 11月 森洋明研究員  
85話「子供には重荷」
- 第6回 1月 中西光一研究員  
144話「天に届く理」

グローバル天理  
第25巻 第9号 (通巻297号)

2024年(令和6年)9月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050  
TEL 0743-63-9080  
FAX 0743-63-7255  
URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>  
E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社  
Printed in Japan